

## 和歌祭の創始と江戸時代

和歌祭は、1622年（元和8）に創始された紀州東照宮の祭礼です。初代紀州藩主・徳川頼宣は父・徳川家康が没した時、家康が隠居していた駿府の藩主であったこともあり、紀伊国入国後すぐに天台座主・天海を招き、天耀寺（のちの雲蓋院）と和歌浦東照社（現紀州東照宮）を創建します。そこではじめられた祭礼が和歌祭でした。それ以後、江戸時代を通して御三家・紀州藩の「藩祭」として盛大に行なわれていました。

この祭礼の特徴は和歌山城下町民が練物として参加することであり、このことは全国の東照宮で行なわれる祭礼では最古の事例にあたります。練物としては、大幌（母衣）、長刀振り、雑賀踊、餅搗踊り、唐船や昇山などが城下町民によって出され、和歌の浦で盛大に行なわれていました。



雑賀踊（笹羅踊り）



唐船・御船歌



母衣



東照宮縁起絵巻 第二巻 住吉広通筆 正保3年(1646) 紀州東照宮蔵

## 和歌祭の危機

和歌祭の存続が危ぶまれた時期は1665年（寛文5）の家康五十回忌終了後と明治維新後の1871年（明治元）の神仏分離令、そして太平洋戦争による中断です。それらの危機では和歌祭が自体が中断したり、多くの芸能が失われることもありました。

## 和歌祭の復興と現代—和歌祭四百年式年大祭にむけて—

和歌祭はこうした多くの危機を乗り越えてきた歴史があります。1665年の縮小令以降では、すぐに母衣や唐船が復興し、また1800年（寛政元）に『紀伊国名所図会』を編纂した高市志友によって餅搗踊りが復興されます。また、神仏分離令の影響で1871年に中断された和歌祭はその2年後に旧紀伊藩士による寄付を受け、東照宮の「宮下」であった旧和歌村（現和歌浦）の有志によって再興されます。さらに南海電鉄の敷設にともなって1897年に刊行された宇田川文海による『南海鉄道案内』に「天下三大祭の一つ」と記されたことで、明治、大正期は十万人超の安定した集客を誇る大祭礼となっていました。そして戦争による中断を挟みますが、和歌山市商工祭の花形として1948年（昭和23）に復興され、和歌山城までパレードするようになり、和歌山市民に「地元のお祭り」として愛されてきました。

## 和歌祭と未来

平成に入ってから「和歌祭は和歌の浦で」を合い言葉に和歌祭保存会青年部（現和歌祭実行委員会）が中心となって、御船歌や餅搗踊り子方の復興、さらには和歌山大学留学生による唐人の復興が相次いでおり、2022年（令和4）に迎える和歌祭四百年式年大祭にむけて、盛り上がりを見せています。

監修・文責

吉村旭輝

（和歌山大学 紀州経済史文化史研究所・特任准教授）